

浮気はなぜ良くないのか？ －ギリシア神話と社会－

長田 年弘

はじめに

トロヤ神話における最大の英雄といえば、なんといってもアキレウスだろう。アキレウスの怒りと残酷さ、子供のような純真と直情、そしてとりわけ『イリアス』最終歌に見られる優しさと憐れみ。振幅の激しい彼の気性の造形こそが、ホメロス作として伝えられるこの叙事詩の主題とってよいだろう。

しかしこの小文では、同じくトロヤ物語を素材とするのだけれど、アキレウスではなく別の人物を取り挙げてみたい。筆者にはトロヤ伝説の真の主人公は、敢えて言えばアキレウスではなく、もう一人の人物ではないかと思われるのだ。人物造形の点ではあまりぱっとしないのだが、アキレウスやオデュッセウスに劣らず、物語を押し進める重要な役割を果たしている人物である。彼は英雄らしい英雄ではない。むしろその反対で、男らしさとは縁のない、見かけ倒しの女々しい人物である。それは、アレクサンドロス・パリスである。

パリスはトロヤ物語では一番の小心者である。いずれ劣らず豪放磊落で、柄の大きなトロヤ戦争の英雄たちの中では一人だけ妙に人間臭いところがある。しかし人間的とはいっても、好人物とはいえないようだ。物語の中では常に好ましくない人物として登場している。要するに否定的に扱われている。

私たちの英雄はなかなか微妙な役どころといえよう。というのも悪役らしい悪役とも違うからである。つまり悪の魅力を感じさせるほどの人物ではないのだ。パリスはドンファンとは異なる。人妻のヘレネを口説いて駆け落ちするくらいだから好色には違いないけれど、猟色に浮き身をやつしているわけではない。色恋に耽る悪魔的な力強さは、感じられない。

パリスは、強いて言えば、小悪党なのだろう。臆病で、美男で、かつ色好みである。日本語で優男（やさおこと）という言葉があるけれど、パリスにぴったりである。パリスを形容するためにあるような言葉である。パリスは、腑抜

けである。腰抜けである。しかし様子は良い男である。男たちからも女たちからも、およそまっとうな人たちからは一様に蔑まれている。敵国の人妻と駆け落ちして暮らす甲斐性なしにすぎない。「まっとうな人間ではない」、これがおそらくパリスの本質である。

しかしこのパリスがいなければ物語は始まらないのだ。そもそもパリスがヘレネを略奪したからトロヤ戦争が始まったのである。そしてまた最大の英雄アキレウスを倒すことになるのも、パリスである。最も卑怯な人間が最も勇敢な男を負かすことになる。雄叫びの声を挙げるだけで敵軍が揃って震え上がる程の豪勇アキレウスを射殺することに、小心者パリスは成功する。

トロヤをめぐる叙事詩の筋書きを陰で押し進めているのは、筆者に言わせれば、人格の点ではなほだ頼りないパリスなのである。物語の真の立役者は、戦場で逃げまどっているアレクサンドロスであるように思われるのだ。

さてこの小文では、パリスの人物造形に見られる二つの特徴、好色と臆病について考えてみたい。古代ギリシア人から見て、パリスはなぜ「まっとうな人間ではない」と感じられていたのだろうか。彼の二つの欠点は一体どのように考えられていたのだろうか。神話を、神話が生まれた時代の眼を通して眺めることによって、もう一度考え直してみたい。

あの男は好色だ、あるいは、小心だと言われたら、そうした評判は現代日本においても確かにあまり芳しいことではないだろう。ただ古典期ギリシア社会において人妻の誘惑と臆病は、現代日本人には全く想像できないある理由によって善からぬことと見なされていた。つまりギリシア人は彼らなりの理由があって、神話上の人物パリスを嫌っていたのである。

1. パリスの審判

トロヤ戦争の遠因は、よく知られているように、三人の女神の美女コンテストにある。世界で最も美しい女性が選ばれるという出来事があり、ヘラ、アテナ、アフロディテの三人が立候補したことから話が紛糾し始める。

もっとも神話の上で美人コンテストがどうして催されるに至ったかに関しては、様々な伝承があってよくわからない。一般的には、アキレウスの両親であるペレウスとテティスの結婚式で、争いの女神が「最も美しい女性に」と書かれた林檎を宴席に投げ込み、誇り高い三人の女神が名乗り出て互いに競ったとされる。ただこの結婚式の挿話は神話としてはそれほど起源の古いものではないらしく、コンテスト開催の由来に関しては、様々な伝承が併存しているのが

実状である。

ともあれ美神の選抜が行われ、その際ゼウスの命令によって、山中で羊を飼っていたトロヤの王子パリスに目利きの任が与えられることになる。これがいわゆるパリスの審判として知られる挿話である。この一節はアポロロスによって以下の様に伝えられている。

しかし後アレクサンドロスがヘレネーを奪った。これは一説によればヨーロッパとアジアが戦いに入って、自分の娘が有名になるようにというゼウスの意によっていると言われ、或いは他の説によれば半神の族が名高くなるためであるとも言われている。これら中の一つの原因によって争いの女神がヘーラー、アテーナー、アプロディーテーに美の賞として林檎を投げ、ゼウスは彼女らをアレクサンドロスによって審判されるべく、イーデー山中の彼の所に導くようにヘルメースに命じた。女神たちはアレクサンドロスに賜物を与える約束をし、ヘーラーは、もしあらゆる女にまさっているとされた時には、全人類の王となることを、アテーナーは戦さにおける勝利を、アプロディーテーはヘレネーとの結婚を、約した。彼はアプロディーテーを選び、ペレクロスが建造した船でスパルタへと出帆した。九日の間メネラーオスの所で歓待せられた後、十日目にメネラーオスはその母の父カトレウスの葬を行うべくクレータに旅だった時、ヘレネーを自分とともに出奔するように説き伏せた¹⁾。

パリスの審判の物語は文学的な主題として大変に巧妙といえよう。というのも比較的短い物語の中に、簡約化された形で様々な興味深い問題が盛り込まれているからだ。

美女コンテストという華やかな主題が、まずそれだけで聞く人を魅了する。三人の女神はいずれ劣らず十分に権高いから、贈り物の提示という短い描写の中にも、それぞれのプライドが互いにぶつかり合っている様子がうかがわれる。

いささか余談になるけれど、三人の女神は現代日本の女優で言えば誰にあたるだろうか。ヘラの役どころにふさわしいのは、さしずめ故夏目雅子、アテナは松坂慶子、アフロディテは樋口可南子といったところだろうか。ただこの選択はやや古いのもかもしれない。今風に言うと、ヘラが鈴木京香、アテナが宮沢りえ、アフロディテが高島礼子ではいかがだろうか。

閑話休題。美女コンテストの審判を任されたパリスには、三つの贈り物が差し出された。プレゼントは物ではなく、人生における力や可能性の提示という形をとっている。つまりトロヤの王子様は何を選ぶかによって、人生の価値観

を洗い直されることになる。

パリスの目の前に出された贈り物は、支配する力と、戦場における常勝の力、人間のうちで最も美しい女の三つである。他人を思うままにする力、勝ちたい時に勝ちうる力と、そして望み通りの恋を得る力である。ギリシア人に限らずいつの時代の人間にとっても、なかなか厄介な選択ではないだろうか。というのも、一つを手に入れるのはよいけれど、残りの二つはあきらめなければならぬのだから。権力と勝利と恋愛。人生とは何か、自分は一体なんのために生きているのか、何を望んでいるのかと問いただされているような気がする。

物語中のパリスの立場にたってみると、災難このうえない出来事だったに違いない。彼は山中で呑気に羊を飼っていたにすぎないのだ。なのに突然神々の使いが目の前に現れて、三人の女神が登場する。自分が本当のところどういう人間なのかを問いただす哲学的な選択を迫られる。

余談が続いて恐縮だけれど、この審判の挿話は福音書における悪魔によるイエスの試みを思い起こさせるように思う。荒野で修行するイエスにも三つの誘惑が与えられる。すなわち（新約聖書に出てくる順に言うと）石をパンに変えること、建物から身を投げて奇跡を期待すること、国々の栄華を治めることである。

ギリシア神話と聖書における三つの選択肢には、確かにどこか似通ったところがあるように思う。パンの誘惑は食欲の問題だから、欲望の充足という点で、選択肢「絶世の美女」に通じるところがあるのではないか。天使による救助の奇跡は、戦場における常勝の力とよく似ている。統治の誘惑にいたっては、ヘラの贈り物と完全に同一である。

ただし無論、神話と聖書とでは結末は大いに異なっている。我らが凡夫パリスは三つの贈り物のうち色恋の道を選んで、これに大いに迷ってしまうが、イエスは荒野における試練を切り抜けることになる。「人の生くるはパンのみに因るにあらず」、「主なる汝の神を試むべからず」、「主なる汝の神を拝し、ただ之にのみ事へ奉るべし」という言葉が発せられて、悪魔は退く。

さてギリシア神話に戻ることにしよう。パリスに差し出されたのは、権勢と、勝利と、色道である。パリスは周知の様に、三つ目を選ぶ。

私たち現代人から見ると、恋人を選ぶパリスは、ある意味では人間的で好感がもてるといえよう。支配する力や必勝の才を選択するというのでは、あまりにも殺伐としているように感じられる。力ばかりを追い求めるといっては、権力志向で、どこか非人間的に思われる。色事ならば、まだしも救いがあるよ

うに思うのだ。

しかし神話を生み、共同体の中で伝説を継承していたギリシア人にとって、パリスの選択はどのように感じられたらうか。古代人の目から見たら、トロヤの王子の人生に対する姿勢はどんな風に思われたらう。

古代人にとっては、パリスの態度はひどく軟弱に思われたのではないだろうか。軟弱というよりも不謹慎といった方が適切かもしれない。彼の選択は間違いなく不評をかった筈である。「男なら」とギリシア人は言ったに違いない。「勝利を選べ。せめて権力だ。女なんて、とんでもない。」

パリスの審判の物語を聞いた古代人は、誰でも同じ答を期待したように思われるのだ。「男性たるものはこうでなければならない」という社会常識が確固として存在した時代の話である。現代日本のように、「人それぞれだから」などとは誰も考えなかったに違いない。

パリスが強いられたのは、いわば答があらかじめわかっている踏み絵のような問いだったといえよう。誰もが認める前二者を選ぶか、さもなければ目前の快樂をとるかという試練だったのだ。常識を守るか、それとも道徳を踏み外すか。社会の眼を気にするか、それとも自分自身の欲望に忠実に生きるか。一人前の大人としての名聞を弁えるか、それとも放縦に走るか。名誉か恥か。換言すれば、共同体が自分かという問いかけであろう。臆病者パリスは、自分自身に誠実な道を選んだのだ。

筋書きの進行という観点から見れば、パリスが正道を外れるからこそ物語が回転し始めるといえるだろう。トロヤの王子様が恥多き選択をし、背信の道を選ぶことによって、物語の起爆剤が爆発を起こすことになる。一人の青年の無分別によって、社会で遵守さるべき法則が泥にまみれてしまう。秩序が転覆され、天上にも地上にも混乱が引き起こされる。十年におよぶ大戦争が勃発し、秩序が回復するまでは、トロヤ側にもアカイア側にも神罰が執拗に下ることになる。

パリスはアフロディテの加護を得て、スパルタの宮廷に潜入し、王妃ヘレネを口説いて、トロヤへと連れ帰ることに成功する。

さてここで、パリスの行動がどうしてギリシア人の興味をそそったのかを、もう少し突っ込んで考えてみることにしよう。

ただし一言で古代ギリシアといっても、時間的にも地理的にもあまりにも広大だから、ここでは古代文化の中心地の一つであり、歴史的背景も比較的良好にわかっている、前五世紀のアテネを考えてみることにしよう。

パリスの物語が人々の注意を惹きつけたのは、筋書きの展開そのものもつ魅力もさることながら、彼の言動が当時議論のかまびすしかったある社会問題に関連していたためと思われる。つまり筋書きのある部分が、人々の共有していた感覚を刺激したと考えられるのだ。というのも古典時代のアテネ人は、もともと外国人との結婚という問題に敏感だったように思われるからである。

アテネでは前四五一年に、いわゆるペリクレスの市民権法が成立している。これは、両親共にアテネ人でなければ、生まれた子供には市民権が与えられないことを定めた法律である。この立法によって、父親だけでなく母親もアテネ人でなければ、子供は法律上の正式な跡継ぎとして認められなくなったのである²⁾。

アテネの直接民主政はオイコス（家）を単位とし、オイコスを政治、経済の基盤として成立していた。オイコスが父から子へつつがなく継承されることは、国家の重大な関心事だった。家の秩序がそのまま国家の秩序を意味していたからである。そのオイコスにおいて外国人妻を排除する法律が、ペリクレスの市民権法であった。

この法律がどのような理由によって成立したのかに関しては、現在も諸説あって正確なところはわかっていない。ただ、一つの大きな要因として、アテネに滞留外国人が急増していた問題があったことは間違いない。前五世紀の半ばギリシア世界での最強国の地位にのし上がったアテネには、市外から外国人の流入が相当激しかったらしい。

当時のアテネは帝国への道を歩んでいた。エーゲ海域の都市国家を同盟国として従えて、盟主として様々な権益を手にしていった。市民が市政における外国人勢力の拡大をできるだけ制限したかったのは確実で、ペリクレス市民権法はこうした社会背景をもとに成立したと考えられている。

ともあれトロヤ神話に戻って考えてみると、パリスの行動は古典時代のアテネ市民にとっての、一番の関心事にふれていたことがわかる。言ってみれば、パリスの言動はいちいち市民の気に障ることばかりである。パリスは外国からやってくる。人妻を誘惑して、駆け落ちしてしまう。これはいろいろな意味で良からぬことである。オイコス（家）という神聖不可侵の領域をおかずパリスは、外国人なのだ。彼はヘレネを語らって国外に逃亡してしまう。家の内外、そして市民と非市民という、当時の誰もが線を引いて区別することに躍起になっていた問題に触れて、かき回して滅茶苦茶にしてしまうのだ。

私たちが読めばトロヤ神話は、よくできた、面白いストーリーだというにす

ぎないだろう。しかし古代アテネ人にとって事情は大いに違っていたはずである。彼らにとっては、単なる空想的な夢物語ではなかったろう。砂を噛むようなリアルな側面が、多少なりともあったのではないかと思われるのだ。

トロヤ伝説は、ある意味では、問題児の近視眼的な行動が誰にも解決のできない大事件を引き起こしてしまったという物語である。青年が無分別な判断をし、その結果が膨れ上がって手がつけられなくなるのだが、原因と結果の間の落差が、語りを展開させるエネルギーになっている。放恣な欲望があるべき秩序を破壊し、世界に混乱をもたらしてしまう物語は、人々の心に、美と躍動の光彩と共に、生々しい現実感を感じさせたように思われる。

2. 名誉から義務へ

パリスの言動には好色と並んで、ギリシア人の徳目から著しく逸脱しているもう一つの特徴がある。というのも叙事詩中のパリスは、しばしば臆病な人物として描写されているからである。戦場における勇敢さ、自制心は、おそらくギリシア男性にとって最も大切な品性であったろう。

『イリアス』の中でも、パリスの小心は幾度となく描写されている。例えば彼が戦場において、ヘレネの前夫メネラオスに遭遇する場面である。

その姿神にもまごうアレクサンドロスは、前線に姿を現したメネラオスを見るなり肝を冷やし、死の運命を逃れんと、友軍の群の中へ逃げ込んだ - 山峡の茂みの中に蛇を見た男が後ずさり、手足は震え両の頬は蒼白となって今来た道を引き返す、その男にも似て容姿神にもまごうアレクサンドロスは、アトレウスの子を怖れて、勇武のトロイエ勢の群がる間へ身を隠した。

続いて兄ヘクトルが、彼をさんざんに罵る場面が描かれる。ヘクトルは志操堅固、いわば良夫賢父の典型のような人物で、蕩児パリスとは対照的である。

この碌でなしのパリスめが。いかにもお前は姿形でこそ誰にもひけをとらぬが、その正体は色気狂いの女たらし、そもそもお前のような男は生れて来ねばよかった、妻も娶らず死ねばよかったのだ。わたしは心からそうあれかしと願うぞ。お前がこうしてわれらの顔に泥を塗り、皆の者から侮りの目で見られるよりは、その方がどれほど良かったであろう。恐らくはアカイア勢も、お前の美貌に欺かれて第一線の勇者と思い誤ったが、その実、肝の中は空っぽで、勇気も力もないと知れば、大声立てて笑うであろう。よくもそのような腰抜けが、手勢を集めて、海渡る船で大海を越え、他国の人間に誼みを通じて美しい女一

—それも既に武門の家に嫁した女を、遙かな異国から連れ帰ったものであったな。それがお前の父と祖国、また国民全部に禍いをもたらし、敵には楽しい笑い草、お前自身には人前にも出せぬような恥辱の因となったのだぞ³⁾。

臆病が古代ギリシア人にとって他の何よりも恥ずかしいこと、名誉を汚す振る舞いであったことは、改めて言うまでもないだろう。ただ『イリアス』においてパリスは、単に気が弱いとか、肝っ玉が小さいことが問題にされているのではない。話はそれだけではないので、そのことは非常に大切なことのように思われる。

兄ヘクトルを始めとする親族は、パリスに向かって口を酸っぱくして、彼がどれだけ「恥ずかしく」、「周囲に迷惑を与える」振る舞いをしているかを、気づかせようとしている。自覚させようとしている。しかしパリスにはどうしてもそのことが呑み込めない。ホメロスを読んでいると、私たちは何度もそういう場面に遭遇する。

例えば、ヘレネが義兄ヘクトルに、夫に関する不満を訴える場面である。ヘレネの口吻は、分からず屋を抱えた一族の苛立ちを鮮やかに描写している。

「(私が) 世間の人々の怒りや悪口を感ずることのできる人の妻であつたらと思ひます。今のあの人には、しっかりとした気持ちなどありませんし、これからありません⁴⁾。」

いつの時代にもどこにもいるトラブルメーカーと周囲の焦燥を、これほど簡潔に描写してみせる文章は古今に少ないだろう。パリスは自身に寄せられている悪評を理解していない。だから周りの人は腹を立てるのだ。三千年近く前に書かれた文章なのに、現代日本人が読んでも奇妙な現実感がある。厄介者が困るのは何よりも話が通じないからで、これほど普遍的な真理は他にないのかもしれない。

パリスは例えば、先にも引用した『イリアス』第三歌で、自己中心的ないつもの無軌道ぶりを遺憾なく発揮している。メネラオスとの一騎打ちに敗れた彼は、アフロディテの加護によって宮廷に逃げ戻る。自分を侮辱してやまない妻ヘレネの腕をとり、愛し合いたいからと言ってベッドへ誘うのである。

ゼウスの姫ヘレネは、それに座ると眼を背けながら夫を責めていうには、

「戦場からお帰りになったのですか。わたしの元の夫であつた、あの強い男に討たれ、そのままあそこで死んでおしまいになったらよかつたのに。(中略)」

そのヘレネにパリスが答えていうには、

「妻よ、どうかそのような激しい言葉で、わたしを根性なしと責めないでくれ。さっきのメネラオスは、アテネのお助けがあって勝ったのだ。今度はわたしが彼を負かす番だ、われわれにも神々がついていて下さるのだからな。しかしまあ今は、床入りして愛の楽しみを味わおうではないか。今ほど愛の想いがわたしの心を包んでしまったことはかつてなかった。（中略）」

こういうと先に立って寝台に向かうと、妻は後に随った⁹⁾。

古代において、ホメロスの詩が人々の間で朗唱されていた様子を思い描いてみよう。吟遊詩人が宴席においてこの挿話を語るのを聞けば、聴衆の誰もが、パリスの無自覚無反省に舌打ちしたに違いない。男性の武勇が至上の価値をもっていた時代の話である。「臆病者、死んでしまえ」と面罵する妻に、「運が悪かっただけだ。今回は神様が自分に味方してくれるはずだ」と言い訳をして、身体を求めて懇願する。

共同体の感情をこれほど逆撫でする言動は、他に思いつくのが難しいほどである。パリスは単なる臆病者としては描かれていない。卑怯だから良くないのではない。そうではなく、こういう人間が身近にいたらたまらなく迷惑だろうという、そういう種類の人間として描かれている。彼は人々をうんざりさせる。閉口させる。いわば、共同体の中にいる他者、それがパリスなのだ。

ところで、「駆け落ち」の場合と同じように「臆病」も、古代ギリシアにおいては、私たちには思いもよらないようなある理由によって、眉をひそめさせる行為と見なされていた。意気地なしであるか否かは、古典時代のギリシアにおいては、単なる個人の恥と名誉の問題ではなかった。社会的政治的な意義を担っていたと思われるのである。最後に、そのことにふれておくことにしよう。

古代ギリシアの戦争では、ファランクスと呼ばれる集団戦法が盛んであった。ファランクスは遅くとも前七世紀までに実戦に導入された。兜と胴鎧、臙当てを身につけ、盾と剣を手にしたいわゆる重装歩兵（ホプリテス）が、方形の隊列を組んで進軍する戦法である。構成員は各々の盾を連ねて共同の壁を築き、敵の矢と槍を防ぎつつ突撃した。重装歩兵は実際に戦力の中核を成していたらしく、第一次ペルシア戦争の帰趨を決めたのが彼らの戦いぶりであったことはよく知られている。

ホメロスにおいてしばしば描写されるような華々しい一騎打ちによって戦闘が進められる場合には、卑怯や柔弱は個人の栄辱の問題にすぎないだろう。しかし密集戦法においては、小心はいわば社会的な意味をはらむようになる。戦

陣の一角を崩す卑怯な振る舞いは、共同体に致命的な打撃を与えるからである。

臆病は、共同体に対する背信を意味した。こうした事情は前五世紀前半のヘロドトスの著作にも、明瞭に看取することができる。引用するのは、ギリシア人デマラトスがペルシア王クセルクセスに、ギリシア軍がいかに関戦法に長けているかを説明する箇所である。

しかしながらわれわれは叡智ときびしい法の力によって勇気の徳を身につけたのであります。この勇気があればこそ、ギリシアは貧困にも挫けず、専制に屈服することもなく参ったのでございます。(中略)

かくのごとくスパルタ人は一人一人の戦いにおいても何人にも後れをとりませんが、さらに団結した場合には世界最強の軍隊でございます。それと申すのも、彼らは自由であるとはいえ、いかなる点においても自由であると申すのではございません。彼らは法(ノモス)と申す主君を戴いておりまして、彼らがこれを怖れることは、殿の御家来が殿を怖れるどころではないのでございます。いずれにせよ彼らはこの主君の命ずるままに行動いたしますが、この主君の命じますことは常に一つ、すなわちいかなる大軍を迎えても決して敵に後を見せることを赦さず、あくまで己れの部署にふみとどまって敵を制するか自ら討たれるかせよ、ということでございます⁹⁾。

ヘロドトスは言う。ギリシア市民が戦場において何よりも怖れているのは、法(ノモス)なのだ。そしてこの法の命ずることは、ただ一つしかないのだ。「己れの部署にふみとどま」ることである。剛健と懦弱はホメロスにおいては、他の何よりも個人の廉恥の問題であった。しかし前五世紀の歴史家の著作においてそれは、社会の規範を遵守するか否かという問題に変質しているように思われる。法(ノモス)、つまり集団の規律に抵触するかどうかという話に変わっている。

古代の戦争における重装歩兵の活躍とファランクス戦法の発達、アテネにおける直接民主政の成立を促したことは、歴史学の定説となっている。集団戦法における平等意識の発達が、民主体制成立に大きな寄与をしたと考えられるのだ。臆病か否かは、すなわち共同体の約束を違法するか否かであり、それは結局のところ、社会の一角を担うか否かという意識と無縁ではなかったのだろう。

あまりにも自己に正直で、自らの欲望しか頭にない、永遠の逸民アレクサンドロス・パリスは、物語の中で市民の神経を逆撫でばかりしている。しかし考

えてみれば彼の不しだら加減は、個人と共同体という永遠の桎梏を主題としているといえないこともない。

パリスの行動は愚行には違いない。確かに誉められたものではないけれど、どこかに一片の誠実さを感じさせるのも事実である。周囲には迷惑の上なくとも、自分自身にだけは嘘をついていないからかもしれない。反対に、共同体の掲げる理想には、それがどれだけ多数の支持を得ていても、どこかに必ず嘘があるだろう。パリスは体制にとっては全く役に立たない男だが、世間公認の道徳が不可避にはらむ偽善にだけは、決して加担していないのだ。

パリスの言動を考える時、話は飛ぶけれど、筆者は第二次大戦中の二人の人物の挿話を思い出さざるをえない。一人は永井荷風、もう一人は阿部定である。耽美派の文豪は軍国日本を嫌悪し、自ら散人と称して社会に背を向け、偏奇館にとじこもり、もっぱら読書と漁色に耽り続けた。

中野区新井の料理屋の酌婦は二・二六事件の起こったその年に、愛人との情痴の顛末によって世間に一大醜聞を巻き起こした。お定さんの事件は、小説家の丸谷才一によれば、「どつちを向いても歴史的世界、政治と軍事、小銃と演説、軍服と昭和維新と天皇機関説と統帥権干犯と準戦時体制、みたいな世相にあつて」「二・二六事件も満州国も知つたことぢやない」「いとしい吉蔵さんと四畳半でいちやついてゐれば、それでよい」という生き方を提示することによって、当時十一才だった作家に大きな衝撃を与えたという⁷⁾。

アレクサンドロス・パリスの子孫は、いつの時代にもどこの国にも、歴史の片隅にひっそりと生き続けているのだろう。

註

- 1) アポドーロス『ギリシア神話』摘要 III. 1ff. (高津春繁訳)
- 2) アリストテレス『アテナイ人の国制』2 6 章 4 節
- 3) 『イリアス』第 3 歌 3 0 ~ 5 7 (松平千秋訳)
- 4) 『イリアス』第 6 歌 3 4 2 ~ 3 5 8
- 5) 『イリアス』第 3 歌 4 1 3 ~ 4 4 7
- 6) 『歴史』7、1 0 2 ~ 1 0 4 (松平千秋訳)
- 7) 丸谷才一『男もの女もの』1 9 9 8 年

【本稿は 1999 年 7 月 17 日の第 11 回研究発表会で行なわれた特別講演にもとづいている。】